

論壇

1930年代、米が高関税先陣

就任早々、トランプ大統領は保護主義的な発言を繰り返している。TPPからの撤退やNAFTAの再交渉など、選挙期間中の発言を移行に移しただけであるので、想定内ということかもしれない。ただ、速やかに行動に移すところを見て、トランプ政権の保護主義的な姿勢に懸念を強めた人も多いはずだ。それだけでなく、トランプ政権はトヨタ自動車のメキシコでの生産について批判的なコメントをしたり、日米で自動車協議を行う可能性などにも触れられている。

伊藤 元重

学習院大教授(国際経済学)

アメリカ・ファーストという自国利益優先を前面に打ち出し、2国間協議によって譲歩を引き出すという姿勢からは、トランプ大統領がしばしば使うデールという表現を連想させる。今後の世界貿易システムはどうなるのだろうか。

選挙の最中に約束したことなの

めるべきだろう。ただ、本心に酷いことになった時には、どのような状況になるのか。一応は頭の片隅に入れておく必要はある。近年の歴史の中で、貿易戦争が最も激しくなったのは、1930年代のことだ。世界大恐慌の時代のことであり、多くの国が関税引き上げによって貿易を制

歴史に見る貿易戦争

で、とりあえず行動に移す姿勢を示しているが、少し時間がたてば政策ももう少し穏当なものになるだろう。今の時点で大騒ぎする必要はない。そうした見方を示す専門家も少なくない。一部のマスコミが煽るような貿易戦争に発展するとうような過度な悲観論は戒

限し、それで各国の不況がさらに深刻になる結果となった。こうした経済的困難の中で、日本では軍部の台頭が起き、ドイツではナチスが政権を握った。これが第2次世界大戦という悲劇へと繋がる。実は、30年代に関税引き上げの貿易戦争の先陣を切ったのは、当

時の米国であった。これも今の米国と同じ共和党政権の下で、保護主義的な雰囲気醸成され、30年代初めのスムート・ホーレイ関税に繋がるのだ。米国は平均で40%前後という高関税をかけ、外国の製品を米国市場から締め出したのだ。

これが引き金になって、英国やフランスなどの主要国も関税を引き上げていった。貿易戦争が起きたのだ。各国が競って貿易保護を行うことで、世界の貿易は急速に縮小を始め、大恐慌は一気に世界全体に広がっていった。

手放して痛感する恩恵

このような悲劇的な貿易戦争が現代に起こるとは考えたくない。実際、起きる可能性はそれほど大

きくないだろう。ただ、トランプ大統領が選挙期間中から行ってきた発言を額面通りに受け取れば、それは30年代の米国の保護貿易政策に通じるところがあるのだ。

空気が水は、通常はその重要性を認識することが少ない。水不足になったり、大気汚染が起きたりして、初めて私たちは空気が水の大切さを痛感することになる。自由貿易の制度も同じだ。貿易自由化に反対する人も、強烈な保護貿易の世界を経験すれば、それがいかに酷いものか実感するだろう。トランプ政権の保護政策がどこまで激しいものなのか、今の段階で判断するのは難しい。当面は、過度に悲観的にならないで、状況を冷静に見ることが必要だろう。

*この記事は静岡新聞社編集局調査部の許諾を得て転載しています。無断転載、複製を禁じます。